

P. F. ドラッカー『産業人の未来』における文明と社会
——「シュタール論」正統性概念との関連から——

A Study of the Concepts of Civilization and Society:
ocusing on P. F. Drucker's *The Future of Industrial Man* With the Views of the Legitimacy in his *Friedrich Julius Stahl*

井坂 康志
Yasushi Isaka

P. F. ドラッカー『産業人の未来』における文明と社会

—「シュタール論」正統性概念との関連から—

井坂康志 東海大学総合情報センター非常勤講師

A Study of the Concepts of Civilization and Society:

Focusing on P. F. Drucker's *The Future of Industrial Man* With the Views of the Legitimacy in his *Friedrich Julius Stahl*

Yasushi ISAKA

Lecturer, Information Technology Center, Tokai University

Peter F. Drucker has been variously known as a journalist and management philosopher. He has earned distinction in each professional roles, but his basic points of view are shown as his analyses of civilization and functioning society through aspects of legitimacy. The aim of this article is to explore the basic concepts between his formative two works, *The Future of Industrial Man* (1942) and *Friedrich Julius Stahl* (1933), focusing on common features of the both.

Drucker selected Stahl as a topic of investigation because he thought that a few elements of Stahl's philosophy provided a sensible alternative to Nazism's reactionary nationalism and Communism's promise of the Utopia. He viewed European societies through Stahl's aspects as organic interactions between continuity and change, which provide the modern societies stability and challenging opportunities. He interpreted continuity and change from an organic historical perspective. By Stahl's disciplines, he obtained his unique views on essential requirements for civilization and functioning society, which are three elements as status, function, and legitimacy.

The Future of Industrial Man, Drucker's second major work, was published during World War II. The new work echoed both the malaise of Western civilization and the failings of modern industrialism that were treated in his former work, *The End of Economic Man*. It troubled him that despite all their technological progress, the developed nations had not created a genuine legitimacy for functioning society. This failing was the chief reason for the crisis of his times. The book reinforces most of the main points of his political and social philosophy found in *Stahl*. He applied Stahl's legitimacy disciplines found in the early 19th political issues to his ongoing unstable situations in 1930s. As a conclusion, we show that he almost succeeded his Stahl legitimacy concept but one critical difference. It is his effort to prescribe in some detail to create new legitimate order, which needed to overcome the challenges and dilemmas of building a harmonious industrial society. He singled out the large corporation as the foundation of structural change for the new civilization and society.

Accepted, January 12, 2006

はじめに

ピーター・F・ドラッカー (Peter F. Drucker, 1909-2005) は戦後のマネジメント体系に大きな貢献を行った経営学者であり、また文明、技術、社会等の多様な領域における評論家としても知られている¹⁾。とりわけ第2次世界大戦までの2つの著作(『「経済人」の終わり』(1939年)、『産業人の未来』(1942))は、当時のヨーロッパの経済社会に関するさまざまな事実を取り扱っているが、ドラッカーは常に正統性確保の観点から社会問題を分析する²⁾。

一方、本稿で取り上げる『産業人の未来』は第1次世界大

戦後の文明転換から未来を展望し、新たな正統性確保の原理を示したものであり、経済社会の生成と発展について『「経済人」の終わり』よりもさらに踏み込んだ野心的な分析が試みられている。というのは本書執筆の目的が、人間社会の成立条件を探り、それらの新たな時代状況への適用にあつたためである。ドラッカーはこの企てのために当時のあらゆる社会科学、人文科学的知見を総動員することで、欧米経済社会の考察を行った。

複数の知見を総合するドラッカーの探究姿勢については、彼の個人的な知的背景が関係していると思われる。彼は、1909年ウィーン郊外の街に生を受けている。父アドルフは政府高官を務め、母キャロラインは医師であった³⁾。一方で家系には音楽家や作曲家、音楽史家など多く、このような家庭環境はドラッカーの精神形成過程においてきわめて大

本論文は、「文明」投稿規定に基づき、複数レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2006年1月12日

きな役割を果たしたものと考えられる。ドラッカーの思考は、高度に理性的な分析能力と、芸術的な知覚能力の絶妙なバランスのものに成り立つものであるが、これは両親からの影響によるものかもしれない。

一例として父アドルフがしばしば自宅で行った夜会の存在がある。そこでは同僚の政府高官のみならず、法律家、医師、心理学者、自然学者などのウィーン・サークルが一堂に会した。当時知的に早熟な少年だったドラッカーは夜会への出席を認められ、インフォーマルな修養の機会を得ることとなつた。シュムペーター、ハイエク、ミーゼスといった著名な経済学者もアドルフの夜会に訪れた。さらには、後に初代チエコ大統領に就任するトマス・マサリクもしばしば出席したという。また、ドラッカーの叔母の夫となった著名な国家法学者、ケルゼンもいた⁴⁾。この特別な知的環境が彼の後の評論活動に大きく影響を与えたことは想像に難くない。

さらには彼が当時の時代診断に深くコミットし、かつ新社会の再建に臨んだことも少年期の知的鍛磨の賜物といえた。故郷ウィーンの文化的退廃に嫌悪感を抱いていたにもかかわらず、彼はヨーロッパ文明の中心地で終焉に向かう近代西欧の姿を見通すのにふさわしい場に身を置いていた。自伝等の資料からも窺えるように、彼は時代の空気をはっきりと肌で感じた知識人だった。

本稿の目的は次の通りである。本稿では青年期（ドラッカー24~33歳）に執筆された『産業人の未来』と初期習作の「シュタール論」(Friedrich Julius Stahl: *Conservative Theory of the State and Historical Development* (1933年))とを関係付け、『産業人の未来』における「正統性」(legitimacy)概念が「シュタール論」を土台とするものと考える。言い換えれば、『産業人の未来』の主題である保守主義や社会の成立に関わる認識の基礎に、「シュタール論」で示された正統性概念が置かれるものと見て、このことを分析対象とする。

ドラッカーは経済社会上の制度構想にあたり、大衆の価値観や信条的側面をきわめて重視する。それは彼が欧米社会を抽象的システムではなく、歴史的な所産として理解したことの現れである。こうした観点からドラッカーの社会思想と後のマネジメント体系に見られる経営思想との統合的把握が可能となる。『産業人の未来』で示されたドラッカーの正統性概念が「シュタール論」のそれを基盤としたことは確かといえるが、一方で新たな文明社会に接続可能ないいくつかの概念

上の工夫をも行ったとすることが本稿の結論である。

構成は以下の通りである。第1節では、執筆時期から両書の関係を考察し、「シュタール論」に見られるドラッカーの社会論の構想について検討する。第2節では「シュタール論」で展開された社会論、とりわけ正統性（legitimacy）概念に注目する。第3節では、「シュタール論」の正統性概念を基礎に、『産業人の未来』における社会分析および時代診断が行われたことを明らかにする。以上を踏まえた最後に、「シュタール論」を要説することで、『産業人の未来』ならびにドラッカー思想全体に新たな位置付けが見出せることを提起したい。

I. ドラッカーの社会論——「シュタール論」

I. 1 「シュタール論」および『産業人の未来』の執筆時期

「シュタール論」について考察を進める前に、まず「シュタール論」と『産業人の未来』の執筆時期について明らかにしておきたい。

「シュタール論」は原書で30頁に満たない小著である。すでにジャーナリズムや政治の場で精力的な活動を開始した時期に書かれた事実上の処女作といえる。ナチスが政権を掌握する直前、1933年の4月終わりに彼はドイツを脱出し、イギリスに向かう。その直前、彼は「シュタール論」を名門出版社として知られるチュービンゲンのモア社から出版した。付言すれば、本論の考察対象であるF・J・シュタール(Friedrich Julius Stahl, 1802-1863)はビスマルク以前のプロシア政治史ではよく知られる思想家・政治家であった。プロテスタントに改宗したユダヤ人であり、ヘーゲルを批判的に継承した知識人であった⁵⁾。

一方、『産業人の未来』は9年後の1942年に書き下ろしとして発表された。いわばナチズム批判の政治の書『経済人の終わり』の続編として構想され、産業社会という新たな文明社会への一定のヴィジョンが示された。

『経済人の終わり』『産業人の未来』は時期や内容における連続性を見るならば、「シュタール論」という種子から萌芽した果実と見てよい。特に『産業人の未来』は正統性概念を正面から考察し新社会への位置付けを行った点においてその関連性はきわめて高い。

また、両書を貫く縦糸としてその時論性の高さも見逃すことはできない。『経済人の終わり』では、ナチズム批判の形態をとる政治の書という宣言がなされるが、この高度に現実

的な思考態度は後の作品でも明確に継承されている。ドラッカーにとっては常に生きた現実が主要関心事であった。ゆえに『経済人の終わり』で用いられた分析手法や思考態度は『産業人の未来』にもいかんなく適用された。そして、いずれもその基礎的視角や価値意識は「シュタール論」との関連性において理解することが可能である。それは社会を大衆の信条や価値観から観察し分析するという、当時としては斬新な手法でもあった。

I. 2 「シュタール論」の背景

それではドラッカー自身の思想形成の軌跡、すなわち政治思想からマネジメント体系への展開、および時代の診断に関わる契機と問題性とはいがなるものであったのだろうか。この問題を1910年代の少年期のウィーン、1920年代のフランクフルト、そしてナチス・ドイツからの脱出後の1930年代、ロンドンからアメリカへの移住という第1次世界大戦から第2次世界大戦にかけての個人的経験のなかで捉え直すならば、当時の時代状況の理解を避けて通ることはできない。単に政治的性格を帯びた認識や理論だけでなく、いかなる思考の営為にあっても、時代や個人の経験を離れて成り立つことはない。それは、単に彼の思考を突き動かしてきた背景を捉えるということだけにあるのではなく、彼の抱き続けた問題意識の起源を探り、またこれを培養してきた思想史的・精神史的基盤を確かめる意味を持つ。そして、ドラッカーを20世紀前半という危機の精神的・社会的状況に位置付けていこうとする限り、こうした手続きをとることは、問題の所在を捉えていくうえで不可欠の作業といえる。

ドラッカーは青年期の著作においては、企業経営のマネジメントそのものを分析対象としたわけではなく、社会の結合力やそれを培養する意識からスタートしている。その背景としては、文明社会の転換、すなわち社会の継続性に一定の支配力を与える大衆の価値観や信条、位置付けと役割の変化があった。では、なぜドラッカーはこの問題を分析するにあたり、シュタールに焦点を当てたのだろうか。ここで彼が注目するのは、社会における継続と変化という要素であった。ドラッカーは一定の求心力を持ちつつ同時に変化への適応力を有する状態に、機能する社会と停滞する社会の相違を見出している。同時に、「シュタール論」執筆時において、機能する社会の喪失が先鋭的に理解されていた。書き出しは以

下のようなものとなっている。ここにおいて、すでにドラッカーの主要関心が見られるため、少々長い引用しておきたい。

「近年ドイツにおける思想的・政治的闘争のさなかで、常にその必要性が説かれるものがある。きわめて多陣営からのものであり、『躍動する保守主義(living conservatism)』に関わるものである。だが、その必要性を痛感してやまない当人たちにとってさえ、この新たな保守主義なるものがいかなる意味内容を持ち、いかなる行動によって実現されるべきものは不明瞭なものにとどまっている。ここで、連続たる西欧史でこの問題を正当化した最後の思想家が存在する。プロテスタントに見出される真の保守主義者といえるものであり、シュタールこそがそれである。さらにいえば、われわれが今現在の状況において、ビスマルク以降新たに構築すべき課題もここにある。そして、ビスマルク以前のドイツ史でその真価を正当に評価すべき思想もシュタールの功績である。したがって、シュタールをビスマルク以前の最も偉大な政治思想家とする正当な評価こそが、現代を生きるわれわれにとってきわめて重要となる。また、結論を先にいえば、現在においてこそ、1815年以後、栄光ある国家から、国際的な麻痺状況に転落した当時のドイツの状況を再び理解しうる。」⁶⁾

19世紀半ばとドラッカーの生きた1930年代を結び付ける根柢とは文明社会の崩壊にあった。当時のウィーンは文明の中心地としての輝きをかろうじてとどめていたものの、第1次世界大戦後、ハプスブルグ帝国は6世紀にわたる歴史を終え、崩壊した。彼の育った首都ウィーンも19世紀末から20世紀初頭にかけて高度に知的な文化風土を持つ一方で、「神經症的」な様相をも呈していた。後に彼が振り返るように、当時のウィーンは幼年期および少年期という多感な時代を過ごすにあたって、必ずしも居心地のいい環境を提供しなかった。事実、彼はある出来事を通じて、彼の置かれた時代状況がきわめて抜き差しならぬ危機にすることを感じていた。第1次世界大戦がはじまる直前の彼の幼年期における記憶である。

彼が子供用のトイレに入っていると、暖房の配管を伝って3人の大人の声が聞こえてくる。彼の居場所はちょうど父の

書斎の真上に位置していた。3人の大人のうち、1人は父、2人目は法律家の叔父、3人目は後の初代チェコスロバキア大統領トマス・マサリクだった。幼児だった彼には誰の声かはわからなかったが、「オーストリアだけではなく、文明の終わりだ」という言葉が耳に残ったという⁷⁾。彼の文明への関心の芽生えが窺えるエピソードである⁸⁾。

このような第1次世界大戦後の問題状況を理解したとき、ドラッカーがシュタールを「再発見」せざるをえなかつた必然性が浮かび上がる。このことはいわばこれまでの一般通念が妥当しなくなり、社会が麻痺状態に陥った事実を背景としている。一方でシュタールが活動した1850年から60年までの10年間も19世紀のドイツ史における同様の停滞状況にあった。

この時代状況こそが1933年当時のドラッカーに貴重な問題意識を提供した。それは文明の終焉状況を歴史的分析を通じて理解し、そこから未来への一定の解を見出す手法として結実した。その意味で「シュタール論」とは19世紀前半において、同様の危機克服に貢献した先達たるシュタールの思想の本質を汲み取ることで、20世紀における問題を応用解釈する試みでもあった。そこではシュタールが1世紀前に見た現実をドラッカー自らの現実と重ね合わせて理解することで危機の克服が模索された⁹⁾。

では、シュタールは19世紀においていかなる思想的嘗みを行った思想家だったのだろうか。シュタールは独自の保守思想によって、復古および革命という正反対の状況間を揺れ動く、当時の政治状況の克服を試みた。「シュタール論」におけるドラッカーの理解を見るならば、シュタールは生涯4つの知的領域において、社会のあるべき姿を模索している。そこでのシュタールの関心は一貫して形而上学に関わるものであって、全能の神を第一原理に据えた統合および分裂という相対立する状態の克服が目指された¹⁰⁾。このことは同時に、ヘーゲル流の正反対による弁証法をも克服する試みでもあった。政治社会の理念において、彼は内発か外発か、権威か自由かといった両極の問題に対し、西洋形而上学の伝統的価値観を踏まえた政治体制によって一定の解を与え危機を克服しようとした。いわば政治社会を神による神聖な世界計画下での人間による自由な活動によるものと基礎づけた。そして、最終的には、19世紀当時の政治的分裂状況は、立憲君主制によって克服可能なものと結論づけた¹¹⁾。

ここでドラッカーが注目したのは、シュタールによる言説の妥当性であって、実践家としてのシュタールではなかった。同時に、言説内容についても、ドラッカーが受容したのはその継続と変化を旨とする正統性概念のみであり、形而上学に偏した彼のキリスト教思想にまで立ち入って積極的な評価を行ったわけではなかった。この点についてドラッカーは、シュタールはあまりに教条主義的であって、この点が彼の政治家としての失敗につながったと評価する。

「われわれは『躍動する保守主義』の本質をシュタールの政治活動に対してではなく、言説のうちに見出す。政治家としてのシュタールはこの称号に値しない。むしろ、同時代や後世からも、反動主義者としての均整を欠く評価しか与えられなかつた。確かに彼はあまりに教条主義的であった。厳格な法理論家であり、定式化や反措定にも失敗した。」¹²⁾

ドラッカーによるシュタール理解のポイントは、社会における継続と変化の統合と調和のなかにのみ文明の維持と発展は可能となるとの確信にある。このことは「シュタール論」の副題が「保守主義と歴史の進歩」とあることからも明らかであつて¹³⁾、彼のいう保守主義の本質とは社会における継続と変化の制度化、換言するならば正統性の確保による機能する社会の構築のなかにあった。さらにいうならば、彼の危機における思想を前世紀においてすでに洞察した論者がシュタールであったといえる¹⁴⁾。

II. 「シュタール論」における正統性の概念

II. 1 1848年と1914年

1848年にはドイツ流の自由主義思想が芽生え、国家社会の脆弱性と不統一性によって、分裂状況がもたらされた。すでにプロレタリア大衆の前衛も存在しており、彼らは王制や教権による政治から市場経済による支配への転換に不満を募らせるとともに、自らの政治的・経済的権力の分け前を要求しつつあった。ほぼ時を同じくして、ナポレオン3世による政変は、シュタールをはじめとした保守主義者の危惧した通りのものとなった。同時に、このような反動が必然的に独裁制を招く現実を大衆は目の当たりにしていた。そのとき、政治と理念の統合が経済によって犠牲にされつつあり、深刻

な内部分裂が惹起されつつあった。

当時のシュタールは、不毛な分裂状態を克服し、多領域の勢力が共通の目的によって統合的に調和される状態を見出す必要に迫られていた。そして、あらゆる勢力が団結できるだけの超越的な原理を根底に有する政治システムが模索された。

シュタールにとって、超越的な原理とはキリスト教による神の観念にほかならなかつた。わけても決定的に重要だったのは、シュタール自身の個人的歴史であった。ゲットー生まれのバイエルン系ユダヤ人だった彼は19歳のときにプロテスタントに改宗する。このような宗教経験が彼の思想形成に決定的な契機となっていたとドラッカーは分析する¹⁵⁾。

彼が当時支配的な学説であったヘーゲル哲学に異論を唱えたのも彼の個人的信条による。すなわち、ヘーゲル批判の要諦は、歴史の理性的解釈の可否にあつた。むしろシュタールの場合、宗教と哲学の統合、その信仰による裏付けと正統性の付与が生涯にわたる中心的課題であった。彼はあらゆる政治的存在をもキリスト教的神という超越的原理に照らして検討した。ここから現実政治への考察を推し進めつつも、自らの立脚点を見失うことはなかつた。このことが彼の正統性概念に高度の説得性と一貫性を付与するものとドラッカーは考えた¹⁶⁾。ドラッカーの受容したシュタールによる正統性概念には、継続における正統性と変化における正統性という2つの重要な要素が含まれる。以下「シュタール論」を参考にしつつ、それぞれ検討していくことにしたい。

II. 2 神の国と現世——継続の正統性

ドラッカーが「シュタール論」において展開する基礎理論というべきものが、超越性に関する概念である。先述のように、シュタールによる社会の第一原理とは神の観念に関わる。

しかし、歴史的・社会的条件にしたがつて超越性の本質を具体的に把握することは困難である。この点はドラッカーも留意しており、概念上の詳細の定義にまでは踏み込んで考察していない。あくまでも抽象的な論考にとどめている。「シュタール論」における超越性とは万物の創造者たる神であり、高次における生ける無限の唯一者である。そして、單一性と複数性を包含する存在である。このように單一性と複数性が統合されたところに、創造的な営みがなされることとなる。人は神と同様の精神的営みを有し、その存在を直覚する

ことで神と内面的交流を持つ。そしてこの神の観念こそが国民形成における統一の最善の契機とシュタールは考えた。シュタールの世界観は、この意味では西洋の伝統的価値観としての二元論である。すなわち、神の国および現世による世界観である。このことを政治社会の文脈で解釈するならば、超越者の存在は国民に対して信仰を通じた暗示作用を有するものともいえるかもしれない。

「自律的意志とその対極をなす義務との対抗関係、すなわち自由と権威との間において、高次の統合および自発的服従がなされることとなる。神により頼む結果として、人間にとて善とは『義務』である一方、自らの人格を持つ結果として、『意思と希望』を持つ。」¹⁷⁾

ここから人間が理性により第一原理を指定し、かつ歴史の意味を決定するとの見解を退けるシュタールの確かな論理をたどることができる。そこには超越者とは人間理性にとって捉えきれるものではないとする前提がある。シュタールの第一原理を支える観念とは超越者の不可侵性、非人為性である。この点に関しては、いわゆる理性万能主義は否定される。理性主義の立場では人間の歴史が即神の国との関係での進歩を意味するものと考えるが、シュタールにとってはこの論理はまったく逆である。神を第一原理とする以上、人間は神の国に対して直接的に働きかけることはない。ここから、シュタールにあっては啓蒙の概念としての進歩も否定された。

しかし一方でシュタールは超越者のみを国民形成の唯一の指導原理とは考えない。ここに社会に関する第二原理ともいるべきものが見出される。そして、この原理は現世における人間社会に関わる。超越者による権威がその力を有効に發揮するには、人間における自由の価値概念を不可欠とするためである。

そこでドラッカーはシュタールにおける神と人間の関係、あるいは神の国と現世との関係を考察する。人間が神の権威を受容し、創造者の被造物たる本性を有するならば、人間はその限りにおいて自由かつ創造的たりうる。そこで人間の営みを神のそれと区別するものとは、有限性のみである。人間は、神の被造物としての本性と同時に「完全なる自由」に生きる存在として、尊厳と働きという相異なる性質の調和によって眞の実存たりうると考える。結果として、人間は被造物

としての性質と自立した個としての性質を合わせ持つことになる。そこにおいて個は超越的存在に服従するとともに、自らの責任において自らの生き方をせねばならない。ドラッカーはシュタールの超越性に関する議論を次のように解釈・評価する。

「人間は被造物としては神への服従の義務を有する一方で、自律的な個として自由をも有する。人間は神に対する義務とともに、自律的な個として自発的に神を受容すべきとされる。神の意思とは、『万物を超越して存在し、万物共通の統治力を有し、いかなる人間に対する指導原理をも提供する』ものである。このような個の意識を統治する意識、すなわち高次の意識に自ら進んで服従する人間こそが精神的に調和しつつ不斷に陥ることのない、人間としての条件を満たす。このような人格こそがシュタールの思想の中核をなした。」¹⁸⁾

この超越性と社会形成の論理に見られるように、ドラッカーは「シュタール論」執筆時点で「神」と「人」の関係性をきわめて重視している。そして、この思考の背後には相互に密接な関係性を有する彼岸（神の国）と此岸（現世）に関わる観念があった。前者においては超越的な神性による普遍的かつ絶対的な目的、目標が示される。これが完全に実現された状態が神の国である。そして、後者では自律的な個があり、自由かつ創造的に活動しうる¹⁹⁾。

「シュタール論」における歴史の進歩とは、神の国との関わりで進行する人間的過程であり、人間理性のみを原動力とするものではない。不完全かつ脆弱ながらも現世において神の国への実現にいたる永遠の過程を指す。いわば上記の思想を正統性の根拠として政治体制に織り込むことがシュタールの念頭に置いた課題であった²⁰⁾。

II. 3 経済社会の論理——変化の正統性

シュタールの言説のなかにドラッカーが見出した今一つの原理とは変化に関わるものであった。いわば継続すべきものとして神の国の抽象的観念に対置するものであり、理論上の2つの基本要素として作用する。

「シュタールの理論は、さらにいえば政治のダイナミ

ズム原理を措定し高次の秩序に関連づけることで、変化を想定しない守旧的性向からの脱却を目指すものである。ダイナミズムを認識することで、シュタールは、自らの立憲君主制概念に変化をも織り込むこととなった。このことで、進歩を追求しながらも、革命という急進的動乱を排除できるものとした。この変化の要因とは『大衆信条』であり、これを君主や臣民と連携させようとするものである。このなかでは、個に対する神の命令が意味を持つ。それを通じて、神の意思は現世の歴史として展開し、人間の罪深い生は『来世に対する準備』としての意味を持つ。結果として政治家としてのシュタールは人間の自由を全面的に認める。財政をはじめとする国家活動が公開されることで、公僕たる臣民は法や法的手続きに従い、議会での討論は公に開かれ、言論・出版の自由は保障されることとなる。」²¹⁾

ドラッカーがここで注目したのは、大衆の信条や価値観によって、変化をも正統的たらしめる方法論にあった。いわばこのことで社会にダイナミズムがもたらされるとともに、議論の可能性を通じた個の自由が保障されることとなる。さらに、変化によって活力と発展がもたらされる。さらに、議論が奨励されることで政治の行き過ぎは抑制され、精神および行動の調和がはかられる。

正統性の原理に大衆の信条を導入することで、従来の固定的かつ有用性の低い慣習は打破され、新たな必要に応じた制度の構想が促されることとなる。慣習とはともすればそれ自体が神聖化され、目的と手段が転倒することがある。ここで変化とは人間社会の進歩と創造性を阻害する慣習を刷新するという大きな効用を有する。ここで超越的な秩序と自由意思の観念が併存し、相互に緊張関係ある調和状態が実現すれば、固定的な慣習を意識的に陳腐化し、社会は弾力的かつ創造的契機を獲得することとなる。

ドラッカーはシュタールの継続と変化に関する言説を積極的に評価する。

「このように、当時の時代状況における新秩序の模索は結論を見ることとなった。われわれは1848年以前のドイツでのシュタールの意義を現在冷静かつ客観的に評価できる。彼の政治思想は厳密な意味において、立

憲君主制という形態をとり、そこでは君主や臣民、大衆が国家の利益において協同する。この思想は1848年以降に力を持つにいたった。シュタールは理念型を最初に示したのみならず、独自の卓抜な世界観による社会の基礎付けも同時に行つた。」²²⁾

ドラッカーがシュタールの社会論を高次の理念的統合体として調和あらしめる方法論として捉えたことは間違いない。シュタールは特定の勢力に妥協することせず、当時のあらゆる反対勢力を新たな高次の秩序に再統合しようとしたためである。

II. 4 シュタール思想の特質

ドラッカー「シュタール論」における特質を筆者なりに解釈するならば、以下のようなものと考えられる。

第1に、現実を重視した世界観がある。シュタールにあっては哲学としては形而上学にいささか偏する嫌いはあったものの、政治社会に関しては理念と現実が分かちがたく結びついていた。両者は分離不能なものであって、統合体としての機能が構想された。ここでの彼の問題関心は常に国家および国民の形成に関わるものであって、それらの全体像を考察対象としていた。したがって、特定の要因のみを分離し、単独で考察することに意味を見出さなかった。対立し合う諸要素をいかにして高次の秩序のなかで機能させうるかに腐心したのもこのためであった。

第2に、一元的な理性主義への反発がある。シュタールは人間理性を第一原理とすることには徹底的に反対を貫いた。シュタールの時代にあって、仮想敵たりえたのはヘーゲルであった。この意味ではシュタールはヘーゲルの合理主義を批判することで、自らの立脚点を築いたといふこともできる。彼には理性のみを通じた責任、秩序の創出は、必ず文明社会という統合体の崩壊につながることが先鋭的に認識されていた。ドラッカーによれば、「彼にはその明敏な洞察を持って、遅かれ早かれデカルト流の合理主義は破綻することが見えていた」という²³⁾。すでに19世紀半ばにあって、シュタールにとっては近代合理主義は正統性を創出しないとの洞見が持たれていたのである。

第3に、個の自由を相対的に信頼する姿勢である。超越者による正統化がはかられることは、国民の消極的な地位を

意味するわけではない。人間とは自由な存在であり、単に服従のみならず、自ら理解し行動する。国民の意思とは、自発的な意思によらねばならない。ゆえにシュタールは民衆の代表者による組織体の必要性をも主張した。すなわち、正義の公平な配分や人間の自由の保証を判断する政治的機関である²⁴⁾。このことが立法府の正統性の根拠であり、ゆえに抵抗権も許容されるが、一方でそれは神によって付託された権威とともに、歴史的な正統化を経る限りにおいて重要性を持つ。

「シュタール論」において、ドラッカーは社会の成立と発展を正統性の観点から把握した。ここから得られる重要な示唆とは、神からの絶対的正統性と大衆信条による動態的な正統性とが統合体として把握された点にある。いわば一国として見るならば、神の国を地上に実現する主体としての君主に対する忠誠と個の尊厳、そして慣習を自ら陳腐化させ、創造的な社会を実現する自由かつ変化の主体たる国民の存在が重視される。とりわけ、次節に見るように「シュタール論」のしばらく後に発表された『経済人』の終わり』『産業人の未来』は、シュタール論で体系化された社会分析の事例研究と位置付けることが可能である。

III. 『産業人の未来』における正統性概念

III. 1 文明社会の成立条件

ドラッカーは常に分析対象として人間と社会を中心に据えた。彼が後に組織のマネジメント分析に軸足を移した後も、この姿勢は変わることがなかった。当時の彼の問題意識として、20世紀前半の西欧文明が技術や産業をはじめとした変化に適切に対処することなく、むしろ過去の栄光に回帰しようとする不毛な状態の克服があった。当時すでに社会主义や全体主義といった新たな勢力は世界を席巻しつつあり、この危機意識がドラッカーを社会の成立条件に関する考察および新たな文明社会への適応方策の探求に駆り立てることとなつた。

ところで、ドラッカーは当時フランクフルト大学等での学究活動の傍ら、ジャーナリズムや政治活動にも携わっていた。ドラッckerの思想体系が20世紀の転換期から20年代のウイーン、フランクフルトという中心地において築かれたことは、時代診断にあたっても決定的といえ、当時の時代状況と厳しく切り結び、そこから現実的な課題を受け取っていたことは疑いない。もし後年構想される巨大なマネジメント体系の基

本的な性格が、一つの文明の終わりとはじまりを特徴付ける存在であるとするならば、これをいち早く見抜いたドラッカーの思考様式自体が強い時代性を持つものであったことは当然であった。

フランクフルト時代のドラッカーの思想的特質を理解しようとするとき、単にこれまで培われてきた知的基盤や習慣のみでなく、実際に社会人として活動することによって獲得された高度な実践性をも加味する必要がある。さらには、1930年代のドイツという、ナチズム勃興期の時代的コンテキストも総合的考慮に入れる必要がある。特にナチズムとの対抗関係において、彼の基礎的思考は後の活動をほぼ規定し尽くしたといつていいくほどに明確なものとなっている。いわば、『経済人』の終わり』『産業人の未来』は、少年期の精神修養やその後のシュタールから受け取った思考上の型（テクスト）を、1930年代から40年代初頭の西欧という特定の時代状況（コンテキスト）に合わせて解釈する試みであったと考える²⁵⁾。その点において、ドラッカーの初期著作はいずれも危機の時代における野心に満ちた思考実験であった。それは彼の出発点が単に理論的な争点に関する学問的な問題ではなく、高度な実際性の追求にあった事実を反映している。

同時に、このようなドラッカー理解は、まず時代診断の立場に力点を置いて現状解釈を試みようとするものであり、一つの有力な視点を提供するものと考えられる。事実、彼の著作群に通底する思考とは、時代診断の結果捉えた文明の方向喪失の危機を克服しようとするものであった。ドラッカーは『産業人の未来』を「社会について的一般理論」の書と位置付けている²⁶⁾。当時のヨーロッパは世界最大の文明を有する地位にあったものの、その存続はきわめて脆弱なものであり、人間と社会の絆が急速に失われていく様相が彼には見てとれた。社会とは人間に対して常に圧倒的な力を持つものであるが、同時にその成立条件に着目するならばきわめて繊細な性質を持つ。ドラッカーは社会の繊細さゆえに、一度断ち切られるならば、償い得ない危険をもたらす事実を強調する。そこで『産業人の未来』で示された基礎的視座、すなわち機能する社会の条件の明確な縦糸こそが正統性の概念にはかならなかった。

『産業人の未来』での社会に関する諸観念は伝統的な保守主義の語彙を使用しつつも、意味内容として斬新かつ重要な示唆を包含するものであった。ドラッカーは20世紀にお

ける社会学者たちが社会の問題を保守主義のパースペクティブから適切に取り扱っていないと感じていた。社会や文明における危機状況の原因を分析・分類することにはさほどの意味はなく、重要なのは今現実として存在する危機であって、それに対する具体的な診断や処方がなされる必要があつたためである。

ドラッカーにとって社会における意味ある個人、コミュニティの創造、そして正統性の維持・発展とは不即不離の関係にあった。ここで彼にとって喫緊の課題として認識されたものとは、「シュタール論」で示された社会の継続と変化に関する諸条件であった。ドラッカーによる時代診断と処方箋とは以下のようなものであった。

「すでに、民主主義国に共通の価値観、信条、制度が崩壊したために、ファシズム全体主義が力を伸ばしている。このたびの戦争は西洋社会の未来をかけた戦いであって、軍事的帰結は別として、ファシズム全体主義なる文明の枠外からの攻撃を退けるだけでは勝利したことにはならない。このことは問題の解決はわれわれの社会の内部において行われるということを意味している。すなわち、歴史の試練を経た自由の理念にたち、政治的、社会的権力を組織化するための新しい制度を生みだし、さらには、社会そのものの新しい基盤を再考し、再形成することから問題の解決ははかられるのである。」²⁷⁾

このような観察結果から、彼は社会成立に必要な理論上の3つの基本要素を提示する。以下、筆者としての解釈を示したい。

第1は位置付け、言い換えれば社会における人間の尊厳であり、目的としての価値を有する人間という捉え方である。第2は役割、すなわち社会における人間の働きや機能である。いわば、人間の意味に関わる概念といえる。第3は権力の正統性であり、「高次の規範、責任、ヴィジョンを根拠とする社会的認知によって正当化される権力」である²⁸⁾。いずれも生命体ないしコミュニティとしての社会の存続と発展に関わる²⁹⁾。

「社会というものは、一人ひとりの人間に対して『位置』と『役割』を与え、重要な社会権力が『正統性』をもたなければ機能しない。前者、すなわち個人に対する位

置と役割の付与は、社会の基本的枠組みを規定し、社会の目的と意味を規定する。後者、すなわち権力の正統性は、その枠組みのなかの空間を規定し、社会を制度化し、諸々の機関を生みだす。」³⁰⁾

第1の要素である「位置付け」を用いて、ドラッカーは社会における人間の継続性を意味付けようとする。それはいかなる時代でも変わることのない、人間本来に備わる究極的目的的価値およびその確保への努力である。そこにおいて、人間は自由かつ平等であり、侵すことのできない責任と権利を有する。超越的原理ないし理念と人間との間に成立する縦の関係と言い換えることもできるかもしれない。

第2の要素である「役割」については、不斷に変化する社会に適応し、貢献する人間の機能が重視される。社会を構成する人間同士の間で成立する関係であり、各個人の協同が目指される。この役割によって人間と人間は縛を通じた横の関係を見出し、相互の信頼関係において社会を生命体、コミュニティとして維持・発展させることが可能となる。そして、位置付け、役割いずれも高次の正統性の根源として機能するものである。

第3の要素である「権力の正統性」とは、社会の私的関係を公的ないし政治的次元に昇華させる原理である。社会の成員が共通に有する高次の規範、責任、ヴィジョンを根拠とする社会的認知によって正当化される権力、換言するならば、人間が誰しも世界に対して持つ理念的イメージ、生活世界像を基盤とする権力ともいえる。これら3つの要素はいずれも統合的に成立する。位置付けと役割が社会の構成員に関わる概念であり、正統性は社会全体の枠組みに関わる概念であるが、ともに有機的な連携によって社会は成立する、システム的な体系と解釈できる³¹⁾。

III. 2 社会の危機と正統性概念

では、ドラッカーはこのような概念を危機の時代状況にいかにして適用したのだろうか。もちろん、正統性とは社会に対し一定のエネルギーを与える超越的規範であって、その意味においては継続性に根拠を与える概念と考えられる。しかしたとえば、戦争や政変、革命、恐慌といった要因によって社会に衝撃が加えられると、かつて当然とされた高次の規範や価値意識といったものが転換する。これは頻繁に起る性質

のものではないと思われるが、ドラッカーの青年期の20世紀初頭に生じた現実であった。彼はナチズム批判を目的とした前著『経済人』の終わり』で、当時の状況を次のように述べている。

「一人ひとりの人間は、その意味を受け入れることも、自らの存在に結びつけることもできない巨大な機構のなかで孤立している。社会は、共通の目的によって結びつけられたコミュニティではなくなり、目的のない孤立した分子からなる混沌たる群衆となつた」³²⁾「一人ひとりの人間が位置付けと役割をもつ秩序が崩壊したことによって、当然、合理的な秩序だったはずのこれまでの価値の秩序が無効になった。秩序の柱である自由と平等は、合理的な社会において現実のものとされなければ、理解もされないし、意味ももたない。」³³⁾

上記の引用は正統性を喪失し、同時に新たな正統性の創出にも失敗した当時の時代状況の生々しい描写である。正統性とは価値観や信条によって裏付けられることから、短期的な創出はきわめて困難と考えてよい。その結果、一度正統性の確保に失敗するならば、中長期的に複数の代替案から好ましくないものを選択する危険性が高まる。ドラッカーにとっては、正統性喪失の現実への洞察もさることながら、それ以上に新しい正統性の確保に関わる危険性が重視された。すなわち、従来の伝統的価値や現実を無視した熱烈な勢力が形成され、それらが一時にせよ大衆に位置付けと役割を付与し、偽りの正統性を創出する状況こそが危惧された。ドラッカーによるナチズムや社会主義への攻撃とは、まさにこのような不幸かつ不可避的な過程への洞察に根ざしていたと考えられる。

ここでのドラッカーの社会成立に対する見解は、シュタール論の正統性概念および継続と変化の統合に符合すると考えられる。換言するならば、それは社会の本質に関わる見解でもある。一般的には、社会とは変化を常態と見ることも可能であり、継続を常態と見ることも可能である。いずれにせよ、位置付けおよび役割に象徴されるように、両者を統合、調和させ、正統性が創出されるときに真の機能する人間社会を構築しうるとするのがドラッカーの主張である。その意味において、『産業人の未来』における社会の分析は、まさに「シュ

タル論」の国家分析の制度認識にもとづいて展開されたと論じることに妥当性が見出されると思う。

III. 3 シュタール的正統性概念の特殊理論

先述のように、「シュタール論」と『産業人の未来』との間には、機能する社会、換言すれば、位置付けと役割、そして両者を統合的に調和あらしめる正統性確保の重要性を説く点において、明快な連続性が存する。だが、ここで認識せねばならないのは、ドラッカーは「シュタール論」を土台として社会の成立条件を論じ、そこで正統性の保持を第一原理として理解するものの、正統性の価値内容については必ずしも全面的にシュタールを受け入れなかった点である。たとえば、このことを裏付けるものとして、『産業人の未来』「新版への序文」に本書執筆におけるドラッカーの問題意識があり、次のように述べられている。

「本書は2つの社会理論を明らかにしようと試みた。1つは、社会について的一般理論である。社会が機能し、かつ正統性をもつための条件を明らかにしようとした。もう1つは、産業社会についての特殊理論であって、20世紀に出現し、第2次世界大戦とともに支配的となった産業社会に対してこの一般理論を適用した。」³⁴⁾

ここでは2つの問題意識が表出されている。一つは「までもなく機能する社会についての一般的条件であり、これ自体は「シュタール論」のそれと同義と考えてよい。しかし、今一つはドラッカーが本書を執筆した時代状況を踏まえた問題意識であって、そこでは従来の正統性がすでに喪失され、新たな正統性の創出こそが喫緊の課題であることが明確に認識されていた。つまり、第1次世界大戦後の社会（ドラッカーのいう産業社会）³⁵⁾とは従来と正統性確保の方法を異にする文明社会であって、そこでは自ずとそれに向けた形式・内容は異なるものと認識されていた。これこそがドラッカー自身述べるように、シュタールによる正統性概念を「一般理論」とし、産業社会における正統性の創出と確保を「特殊理論」とした根拠と考えられる。ここでは、一般理論は社会成立の形式と価値内容を重視する一方、特殊理論とは将来に関わることゆえいまだ明確な姿を持たず、必然的に曖昧な期待をも含むものとなる。その意味で「シュタール論」においては正

統性概念の形式のみならず価値内容まで明確に認識された一方で、新たな産業社会の正統性とは価値内容にまで言及できるだけの実体性を備えていなかったともいえるかもしれない。『産業人の未来』においてドラッカーは産業社会の正統性について次のように述べる。

「権力の正統性とは機能に関わる概念である。したがって、絶対の正統性などというものはありえない。権力は、社会の基本的な理念との関連において正統でありうるにすぎない。権力の正統性を構成する要素は、社会とその政治理念によって異なる。権力は、社会の価値観、形而上の理念によって認知されたとき、はじめて正統なものとなる。その理念自体が倫理的に良いか悪いか、形而上に正しいか間違っているかは関係ない。」³⁶⁾

ここでドラッカーはシュタールの正統性維持の形式要件は継承しつつも、その価値判断は社会の理念との関係において決定されるものとした。換言するならば、正統性の価値内容とはあくまでも現世という此岸において相対的に決定されると言ったことになる。

これは正統性に関わる議論について質的な転回をも意味する。「シュタール論」から得られた示唆を振り返ってみると、そこでの第一原理とは超越者、すなわちキリスト教的神に関わる観念であった。神の観念が政治理念の中核に位置付けられることは、その超越性、つまり人間理性では把握できず疑いえない至高性を根拠とすることと同義であって、このことが大衆にも尊厳と役割を付与し、ひいては国家の統合的調和に寄与するものと考えられた。さらには、西欧社会の知的伝統からも、神を第一原理とすることは、社会の価値観・信条から自然でもあったため、社会を生きる人間は自由と権威との間において、自発的服従および高次の統合を形式上比較的容易とするものであったと考えられる。

では、なぜドラッカーは正統性概念を社会という現世における相対的決定事項とせざるを得なかつたのであろうか。この問題の詳しい検討は正統性概念とマネジメント体系との接続として次稿以降の課題としたいと考えるが、これを解く鍵が新たな文明たる産業社会の特質にあったことは間違いない。ドラッカーは産業社会の特徴を以下のように説明する。

「今日の産業社会の特徴は、大量生産工場と株式会社にある。（略）そして、この株式会社の経営陣が、産業社会において決定的な権力を握つにいたつた。」³⁷⁾

つまり、ドラッカーによれば新たな産業社会においては、権力の所在が大企業に移行したことが本質的変化であった。ここにおいて正統性概念は決定的に従来と異なるものとなる。権力の所在の変化は、ドラッカーのいう社会の一般理論の適用方法の変化を意味し、具体的にいいうならば、位置付けと役割、権力の正統性確保のあり方そのものの変化をも意味する。従来の社会では国家や教権、軍といった西洋的諸価値の根源たるキリスト教を理念、つまり正統性の根拠とすることが可能であった。「シュタール論」で展開された立憲君主制の正統性確保もこの論理でなされた。

しかし、産業社会における大量生産工場、株式会社という主要な2つの機関とは、通常大企業という経済的機関によって実現されるものであり、それは経済における生産方式ないし生産組織に関わる機関である。すなわち、これらには従来の形而上の理念を正統性の根拠として無前提に適用することはできない。さらなる問題としては、産業社会にあっては現実的に企業組織を通じて、つまり経営者や従業員といった位置付けと役割を付与することを通じて権力の正統性が確保されるにもかかわらず、企業自体は正統性の課題に無頓着であり、自らを単なる生産組織としてしか認識しなかったこともある。このジレンマは機能する社会にとって新たな危機を意味した。

ドラッカーの『産業人の未来』は、新たな文明社会に対する提言書の色彩が強いものの、わけても大企業を正統性の創出機関として認識すべきであるという強い意志が込められた作品だった。そのためには、一般理論の形式は踏襲しつつも、その手法や価値内容については時代状況に適応する正統性を創出せねばならない。ドラッカーが『産業人の未来』において正統性確保の特殊理論を展開する必要に迫られた背後にはこのような状況があった。

最後に、ドラッカーにとって産業社会の特殊理論の案出が彼の価値観や流儀に反する形で行われたわけではないということを示しておいたほうがよいかもしれない。ドラッカーは『産業人の未来』の基礎的手法「改革の原理としての保守主義」における実証性を次のように説明している。

「これは『伝統の神聖』などとは関係がない。バーグ自身、役に立たなくなつた伝統や前例は容赦なく切り捨てていた。実証志向とは、人間の不完全さに対処するための政治的な方法である。それはたんに、人間は、未来を予見することはできないとするだけである。人間は、自らの未来を知りえない。人間が理解することができるのは、年月をかけた今日ここにある現実の社会だけである。したがって人間は、理想の社会ではなく、現実の社会と政治を、自らの社会的、政治的行動の基盤としなければならない。」³⁸⁾

ドラッカーの立脚点はあくまでも現実にあった。過去に機能したものも、現在機能を喪失するならば大胆に廃棄する必要があった。さらに強調せねばならないのは、産業社会の正統性確保についての見解の変化も、企業とは予め正統性が指定されるものではなく、まさに企業特有の機能によって正統性が「獲得」されねばならないとするドラッカーの姿勢であろう。こうして正統性が絶えざる実践のなかで獲得されることによって、企業は単なる利潤追求のみを行う経済的機関としてのみならず、政治的、社会的機関として機能する社会に貢献することが期待される。ドラッカーが『産業人の未来』で主張した要は、まさに大企業を正統性ある社会的機関として確立すべきとする点にあった。だが一方で、『産業人の未来』の示唆も、「シュタール論」の正統性概念を一般理論、ないし土台としつつ西欧社会の現実変化を応用問題として観察・分析した所産であったと見て間違いない。

結びに代えて

本稿では「シュタール論」を媒介に『産業人の未来』を捉える作業を試みた。そこで軸となったのは、正統性の概念である。ドラッカーの社会分析の要諦として「シュタール論」を捉えることで、『産業人の未来』の正統性概念および制度構想がいかなる形成を遂げてきたかがより明らかになったと思われる。彼は欧米の経済社会ならびに文明を抽象的システムではなく、歴史的所産として理解しようと努めた。その具体的・歴史的なケーススタディとして『産業人の未来』という作品が生まれた。もちろん『産業人の未来』の執筆意図は何よりも新文明の正

統性創出に関わるものだった。そして、その分析の背景には「シュタール論」においてすでに示された歴史的射程があつたと考えるべきであろう。

このようにドラッカー研究において、「シュタール論」はきわめて重要な考察対象であり、ドラッカー思想の要ともいえる。その後ドラッカーは「シュタール論」のテーマであった継続と変化や正統保守主義の歴史的発展という関心を踏まえつつ、企業のマネジメントに関する研究へと軸足を移すこととなる。そこで本稿との関連で正統性概念とマネジメントとの関係を明らかにせねばならないのだが、それについて機会を改めて考察を深めることとした。

謝 辞

本稿執筆にあたり、上田惇生氏（ものづくり大学名誉教授）の貴重なご助言を賜った。記して謝意を表する次第である。むろん、本稿の記述に関わる誤り等は筆者の責任によるものである。

註

- 1) ドラッカーの引用は、Drucker, P. F. (1933) *Friedrich Stahl: Konservative Staatslehre und Geschichtliche Entwicklung*, Mohr; Drucker, P. F. (1939) *The End of Economic Man*, John Day; Drucker, P. F. (1978) *Adventures of a Bystander*, HarperCollins および Drucker (1942) *Future of Industrial Man*, John Day からである。なお、Drucker, P. F. (1933) はナチスの憤激に遭い、焚書とされた。本書はドラッカーが個人的に保有していたものを除けば、一冊だけ誰かによって持ち出され、あるドイツの大学の図書館に保存されていた (Flaherty (1999), pp. 12-14)。近年オーストリアの歴史家Richard Brem氏によって発見され、英訳 (*Friedrich Julius Stahl: Conservative Theory of the State and Historical Development*) の提供を受けた。本稿での引用は同英訳をもとに、筆者が翻訳した。ここでは便宜的に「シュタール論」と略称している。引用文献について邦題、著作名、初出年は参考文献表記を参照。
- 2) ドラッカーは組織のマネジメント体系の開拓者として、あるいは文明の観察者としてしばしば高い評価が与えられてきたが、彼の研究そのものの数は少ない。とりわけ、初期の『経済人』の終わり』『産業人の未来』研究はドラッカーリー研究のなかでもきわめて少ない。この分野で問題とされるのは、社会における自由や理念と制度との関連であり、彼の経済社会に対する歴史的把握である。代表的なものに Flaherty (1999) 第3-6章などがある。日本人によるものとしては三戸 (1971) があり、ドラッカーの社会哲学を考察対象とした数少ない文献の一つといえる。
- 3) アドルフ・ドラッカーはオーストリア・ハンガリー帝国の政府高官を務めた後、ウィーン大学で経済学を教えた知識人であった。同時に当時のオーストリアでも有数の文化人でもあり、ザルツブルグ音楽祭の創設にも携わるなど、きわめて多面的かつ旺盛な知的活動を行っている。後に渡米し、カリフォルニア大学バークレー校の教授となった。ドラッカーハーはオランダ系を祖先に持つ。17世紀にはオランダで聖書、法話集等の宗教専門の出版社を経営していたという。彼の姓である Drucker もオランダ語で印刷人を意味する (Drucker (1978)).
- 4) Drucker (1978), p. 35.
- 5) たとえば『エンサイクロペディア (Encyclopedia)』でシュタールの名を引くと次のように解説されている。「ドイツの法律家、政治家、1802年1月16日、ミュンヘンのユダヤ人家庭に生まれる。厳格なユダヤ教徒として育つが、19歳の時にルター派のキリスト教で受洗し、改宗する。生涯、キリスト教への信仰を堅持した。ヴュルツブルグ、ハイデルベルク、エルランゲンで法律学を修める。ミュンヘン大学の員外講師に任命され、後教授となる。1840年、宗教会議の初代会員に選出される。1850年、短命に終わったエルフルト議会にも選出され、ドイツ連邦に対して反対の意思を表明した。思想的には、シェリングの影響により、キリスト教精神にもとづき、合理主義を批判した。1861年没」。
- 6) Drucker (1933), p. 1.
- 7) Drucker (1978), p. 35.
- 8) Drucker (1978), p. 35.
- 9) 「シュタール論」執筆時の1933年、ナチス・ドイツが欧洲全体を危機に陥れており、すでに彼はジャーナリストとしてのナチズム分析を開始している。この研究は、『『経済人』の終わり』として結実し、1936年に初版がウィーンで刊行された。さらに39年の春、英語の増補版が刊行された。本書において、彼はファシズムやナチズム発生についての諸説を根本から批判した。この意味で『『経済人』の終わり』とは正統性の分裂状況における問題設定が行われた作品として位置付けられる。
- 10) Drucker (1933), p. 1.
- 11) Drucker (1933), p. 5.
- 12) Drucker (1933), p. 2.
- 13) ただし、副題でいう「進歩」を単に理性主義におけるものと受け取ることには注意が必要である。むしろ彼の言説内容を吟味するならば、後の『産業人の未来』で採用される大衆の価値観、信条との相対的関係において正統性は確保されるとの考えが示される。この意味において、いわゆる歴史が段階的過程を追って進歩ないし進化していくという一元主義的な思想とは相容れないものがある。その理由は後述するが、『産業人の未来』までの著作が20世紀中葉の経営学に大きな影響を与えていた事実からも、経済社会分析に正統性という概念を導入した先駆的作品となつたことは間違いない。
- 14) ドラッカーの時代とシュタールの時代を比較するならば、以下の3つの共通する特質が導き出されるものと考えられる。第1に、保守と革命という2つの勢力による拮抗状態により、経済社会に真空状態が存在したことである。これにより、社会は自らの統合を見出すことができず、政治的にも機能不全状態に陥ることになった。第2に、これまで当然とされた正統性が失われたにもかかわらず、新たな統合を創出する正統性概念が未発見の状態にあったことである。ドラッカーにとって、社会とは当然に存在するものではなく、生命体同様に自らの意識的営為によって成立するものであった。第3に、多領域において正統性が模索されるなかで、西欧の伝統や価値意識に真にかなうものが誤った形で見出される危険があったことである。事実1933年にあっては、非経済的な秩序を創出したナチズムが野蛮な政治体制を構築する危機状況にあった。
- 15) Drucker (1933), p. 2.
- 16) Drucker (1933), p. 2.
- 17) ここで重要なのは、シュタールのいう超越者による第一原理とは中世の神権政治とは本質的に異なる点である。神権政治にあっては、中世における大審問官のように媒介者による専横を招く危険性があり、至高の存在としての神の権威が俗化する恐れを絶えず秘めていたためと考えられる (Drucker (1933), p. 10).
- 18) Drucker (1933), p. 5.
- 19) この世界観はドラッカーのキルケゴーを題材とした実存概念にも通じる。「キルケゴーの『神への逃避』は、一人ひとりの人間は、現代社会において孤立した分子にすぎないという認識にたっていた。まさに、この孤独を耐えられるもの、意味あるものとし個々の人間に對し経済社会の枠外で一樹いの新しい価値と基盤を与えることにより、社会の継続を可能にすることがキルケゴーの哲学の中核だった」(Drucker (1939; 1998), pp. 96-97; 邦訳 p. 101).
- 20) ドラッカーが解釈したシュタールの正統性概念は社会成立の必要条件における理念型と理解できる。後述するように『産業人の未来』のドラッカー自身の思想展開を見るならば、シュタールの基礎的思考を継承しつつも柔軟に解釈したためである。
- 21) Drucker (1933), p. 7.
- 22) Drucker (1933), p. 8.
- 23) Drucker (1933), p. 8.
- 24) シュタールは一般参政権に好意的であった一方で、平等な参政権には反対し、上院の役割に期待した。このような代表機関は単に諮問的役割のみならず、投票を通じて政治に参加し、またそれは公聴されねばならないとした (Drucker (1933), p. 5).
- 25) ドラッカーの思考に特徴的に見られる実際性の背景には、文明の崩壊により、真空状態が生起し、そこから導かれる実体的な暴力、断末魔の恐怖、大量殺人といったきわめて血生臭く、死の予兆に彩られた凄惨なものがある。いわば生きるか死ぬかという限界的な状況を扱うものであった。ゆえに、彼が自らの観察結果を状況に關連づけようとしたのは当然ともいえる。
- 26) Drucker (1942; 1998), p. 9; 邦訳 p. iii.
- 27) Drucker (1942; 1998), p. 17; 邦訳 p. 7.
- 28) Drucker (1942; 1998), p. 9; 邦訳 p. iv.
- 29) ドラッカーは社会の成立を当然のものとは考えない。その意味で、社会とは自然に成立するものではない。このことは同時に、社会の定義が困難であることをも意味する。その際、先の3つの要素が機能不全に陥り、期待される成果を生まなくなつたときに社会は終わりを迎える。いわばこれら3要素は、生命体における鼓動や呼吸のようなものと考えられる。しかし現実に社会の危機に人々が直面しても、その複雑さや錯覚、過去のイメージに幻惑され、このことに気づかない。ドラッカーは社会をあたかも生命のように観察し、危機の本質を描寫する。「社会を定義することは、生命を定義するのと同じようにむずかしい。われわれは、あまりにも社会に近いため、多くの些事の脹やかさと複雑さに目を奪われ、社会の基本が見えなくなっている。さらには、社会の確固たる一部となっているために、社会の全体の姿が見えなくなっている」(Drucker (1942; 1998), p. 28; 邦訳 p. 22).
- 30) Drucker (1942; 1998), pp. 28-29; 邦訳 p. 22.
- 31) ドラッカーの場合、社会の危機、ないし死の要因を見定めるに重要な概念としても正統性を定性的尺度として用いている。その意味では正統性とは社会全体に関わる概念であって、診断における効果的な道具概念でもある。
- 32) Drucker (1939; 1997), p. 55; 邦訳 p. 57.
- 33) Drucker (1939; 1997), p. 58; 邦訳 p. 60.
- 34) Drucker (1942; 1998), p. 9; 邦訳 p. iii.
- 35) 産業社会の概念内容については以下を参照。Drucker (1942; 1998), p. 60; 邦訳 p. 65.
- 36) Drucker (1942; 1998), p. 35; 邦訳 p. 31.
- 37) Drucker (1942; 1998), p. 60; 邦訳 p. 65.
- 38) Drucker (1942; 1998), pp. 184-185; 邦訳 p. 229.

参考文献

(一次文献)

- Drucker, P. F. (1933) *Friedrich Stahl: Konservative Staatslehre und Geschichtliche Entwicklung*, Mohr (Translated by Richard Brem, *Friedrich Julius Stahl: Conservative Theory of the State and Historical Development*).
——— (1939) *The End of Economic Man*, John Day (上田惇生訳 (1997)『『経済人』の終わり』ダイヤモンド社).
——— (1942) *Future of Industrial Man*, John Day (上田惇生訳 (1998)『『産業人の未来』ダイヤモンド社).
——— (1978) *Adventures of a Bystander*, HarperCollins (上田惇生訳 (2006)『ドラッカー わが軌跡』ダイヤモンド社).

(二次文献)

- Beatty, J. (1998) *The World According to Peter Drucker*, Simon & Shuster (平野誠一訳 (1998)『マネジメントを発明した男 ドラッカー』ダイヤモンド社).
Drucker, P. F. (1946) *Concept of the Corporation*, John Day.
——— (1946) *The New Society*, Harper & Row.
——— (1954) *The Practice of Management*, HarperCollins.
——— (1959) *Landmarks of Tomorrow*, HarperCollins.
——— (1968) *The Age of Discontinuity: Guidelines to Our Changing Society*, HarperCollins.
——— (1971) *Men, Ideas and Politics*, Harper & Row.
——— (1973) *Management: Tasks, Responsibilities, Practices*, HarperCollins.
——— (1980) *Managing in Turbulent Times*, HarperCollins.
——— (1989) *The New Realities: In Government and Politics / In Economics and Business / In Society and World View*, HarperCollins.
——— (1993) *Post-Capitalist Society*, HarperCollins.
Flaherty, J. E. (1999) *Peter Drucker: Shaping the Managerial Mind*, Jossey-Bass.
Johnston, W. M. (1972) *The Austrian Mind: An Intellectual and*

- Social History, 1848-1938*, University of California Press (井上修一他訳 (1986)『ウイーン精神』みすず書房).
- Tarrant, J. J. (1976) *Drucker: The Man Who Invented the Corporate Society*, Cahners Books (風間禎三郎訳 (1977)『ドラッカーハンター』企業社会を発明した思想家』ダイヤモンド社).
- Rossiter, C. ed. (1961) *The Federalist Papers*, Mentor (斎藤眞・中野勝郎訳 (1999)『ザ・フェデラリスト』岩波文庫).
- 麻生幸 (1992)『ドラッカーの経営学』文眞堂.
- 井上達夫 (2003)『普遍の再生』岩波書店.
- 上田惇生 (2001)「入門 Peter ドラッカー」『週刊東洋経済』(6月 6 日~8 月 6 日号).
- 宇野重規 (2004)「リベラリズムと共和主義的自由の再統合」『思想』No. 965.
- 生松敬三 (1990)『20世紀思想涉猟』青土社.
- 岡本康雄 (1972)『ドラッカー経営学』東洋経済新報社.
- 河野大機 (1986)『ドラッカー経営論の体系化』三嶺書房.
- 篠原歎・井坂康志 (2005)「ドラッカー社会哲学における自由概念の位置付け」『鳥取環境大学紀要』第 3 号.
- (2006)「『マネジメント以前』におけるドラッカーの思考様式に関する試論」『鳥取環境大学紀要』第 4 号.
- 施光恒 (2003)『リベラリズムの再生』慶應義塾大学出版会.
- (2004)「可謬主義的リベラリズムの再定位」『思想』No. 965.
- 田代義範 (1986)『産業社会の構図』有斐閣.
- 辻清明責任編集 (1970)『バジョット・ラスキ・マッキーヴァー』(『世界の名著 60』)中央公論社.
- 野田一夫監修・日本事務能率協会編 (1959)『ドラッカー経営哲学』日本事務能率協会.
- 福田歓一 (1985)『政治学史』東京大学出版会.
- 村上泰亮 (1992)『反古典の政治経済学(上・下)』中央公論新社.
- 山根聰之 (2003)「『ロンバード街』における「高貴な部分」——ウォルター・バジョットの政治経済思想を統合する試み」『一橋論叢』第 130 卷第 6 号.
- (2005)「バジョット『ロンバード街』における信用——『自然学と政治学』の関連から」『一橋論叢』第 134 卷第 6 号.
- 三戸公 (1971)『ドラッカー』未来社.
- 藻利重隆 (1972)『ドラッカー経営学説の研究』森山書店.